

## 關於使用階段觀的日語重音指導

郭獻尹

東吳大學推廣部

### 摘要

日語的「重音」及華語的「聲調」被歸納為不同的重音(廣義)類型(齊藤 1998)。前者為音節間高低差異所產生的重音(高低重音)。相較於此，後者則為音節內部上昇下降所產生的重音(聲調)。因此，台灣學習者在學習日語的重音時，會產生困難。

另一方面，對於台灣學習者的重音指導，似乎主要以「靜態音調觀」，使用「上下」的兩段觀說明居多。然而，觀察實際的發音情形，以「動態音調觀」，使用分為「上中下」的三段觀指導，可以說是較為理想的。

本論文比較了日華兩語重音之差異，並以語言學的觀點，由「舊兩段觀」、「新兩段觀」、「三段觀」、「新三段觀」等重音的階段觀，重新思索使用各階段觀進行日語重音指導的優點與缺點。再由日語教育的立場，將既往的重音指導法進行比較，希望對台灣學習者之日語重音教育提出建議。

關鍵詞：階段觀、舊二段觀、新二段觀、三段觀、新三段觀

## 段階観に基づいた日本語のアクセント指導について

郭獻尹  
東呉大学推广部

### 要旨

日本語の「アクセント」と中国語の「声調」は、それぞれ違ったアクセント(広義)の類型として扱われている(斉藤 1998)。前者は音節間の高低差で作られたアクセント(高低アクセント)であるのに対し、後者は音節内部の上昇下降で現れたアクセント(声調)である。そのため、台湾人学習者は日本語のアクセントを学習する際に、支障を来す。

一方、台湾人学習者に対するアクセント指導は、主に「静的音調観」で「上下」の二段観を使って説明することが多いようである。しかし、実際の音声実態を観察してみると、「動的音調観」で「上中下」に分けた三段観で指導したほうが、理想的だと言える。

本稿は、日中両言語のアクセントの相違を比較し、言語学の観点により、「旧二段観」、「新二段観」、「三段観」、「新三段観」といったアクセントの段階観から、再びそれらによる日本語のアクセント指導の利点と欠点を考える。更に、日本語教育の立場から、従来のアクセントの指導法と比較し、台湾人学習者に対する日本語アクセント教育に提言を行いたい。

キーワード：段階観、旧二段観、新二段観、三段観、新三段観

# **The Instruction of Japanese Pitch Accent: From Level Analyses**

Kuo, Hsien-Yin

School of Extension Education, Soochow University

## **Abstract**

Generally speaking, the pitch accent in Japanese and the tones in Mandarin Chinese are based on differences in pitch(Saito 1998). The pitch accent in Japanese refers to the differences of pitch in height within syllables (high and low); the tones in Mandarin Chinese, on the other hand, refer to the changes of pitch within a syllable. Hence learners of Japanese in Taiwan might be affected by Chinese tones, when they are learning Japanese pitch accent.

The instruction of Japanese pitch accent in Taiwan is phonologically oriented, from a descriptive perspective, which is based on a two-way distinction between high and low pitch. However, from an acoustic perspective, it is proper to use a three-way distinction, that is, high, mid and low.

This paper aims to compare the differences of pitch in Japanese and Mandarin Chinese from Level Analyses: Old 2 level analysis, New 2 level analysis, 3 level analysis and New 3 level analysis. The differences between the four proposals are investigated, and some points will be made for the instruction of Japanese pitch accent in Taiwan.

**Keywords:** Level Analysis, Old 2 level analysis, New 2 level analysis, 3 level analysis, New 3 level analysis

## 1.はじめに

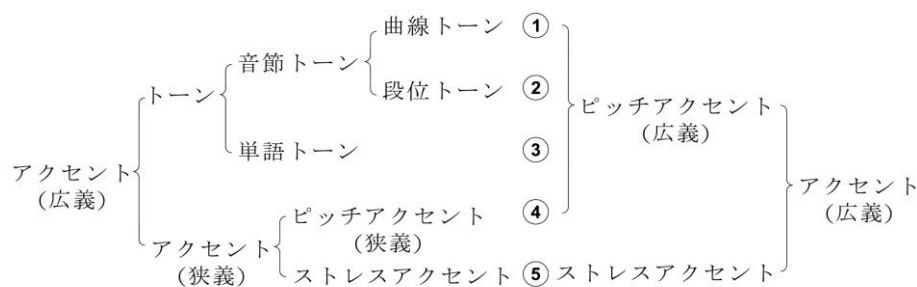
日本語の発音教育と言え、まず「アクセント教育」が思い浮かぶであろう。何故なら、韻律レベルの指導においては、母音無声化、リズム、アクセント、イントネーション、プロミネンスといった学習項目のうち、アクセントが最も基盤的であると言えよう<sup>1</sup>。「アクセント」とは、一つの語に被さった声の高さや強さなどの配置である<sup>2</sup>。また、アクセントは社会習慣に従い、恣意的に決まったものであるため、滑らかで淀みのない自然な日本語を身につけるなら、正しいアクセントを学ぶ必要がある。更に、アクセントは「弁別機能」と「統語機能」を持つため、その習得を重視しなければならない。例えば、「飴」と「雨」、「橋」と「箸」、「日本」と「二本」などの違いは弁別機能と関係し、「言い訳」と「いいわけ」、「拾い物」と「広いもの」、「草いきれ」と「くさい布」などの相違は統語機能に関わっている(天沼他 2001,p.123)。それぞれ取り上げられた例の前者(言い訳、拾い物、草いきれ)は名詞であるが、後者(いいわけ、広いもの、くさい布)は修飾関係である。その上、語彙だけではなく、「母は歯が痛い」や「李も桃も桃のうち」のような文も同じくどこまで高さを保ち続けて発音するかは意味に関わり、統語機能の役割を果たしている。このように、日本語の発音教育におけるアクセント指導が大変重要であることは明らかである。

---

<sup>1</sup> アクセントの習得の成否は母音無声化やイントネーションの習得にも関わる。例えば、「合格者」はアクセントの有無により、母音無声化が起こるかどうかに関係している。アクセントのある場合は「ごうかく'しゃ [go:kaku'eja]」、ない場合は「ごうかく'しゃ [go:ka'ku'eja]」と発音される(松森他 2012,p.99)。また、「そうですね」のイントネーションは、終助詞「か」の上がり下がりにより疑問文か肯定文を表す。しかし、その前の「そうですね」のアクセントが変わらない。もしアクセントを間違えてしまうと、句全体のイントネーションに影響を及ぼす(後述の松崎他(1998)も同じ立場である)。よって、アクセントの指導が大変重要である。

<sup>2</sup> 例えば、英語のアクセントは強さによる強弱アクセントである。それに対し、日本語は高さによる高低アクセントである。また、日本語の単語の中で音の高さが急に下がるところを「アクセントの核」や「アクセントの滝」と呼ぶ(天沼他 2001、上野 2003)。本稿では、統一して「アクセントの核」を使う。

一方、一言でアクセントと言っても、世界の言語はそれぞれ異なった形で実現し、大きく「トーン言語(声調言語)」と「アクセント言語」の二種類に分けられる(図 1 参照)。前者は「どんな」、後者は「どこか」という性質の相違がある(斉藤 1998,p.107)。例えば、トーン言語の①曲線トーンの例として、中国語がある。その声調の特徴は一音節の内部で音調変化が起こることである。一方、アクセント言語の④ピッチアクセントの例として日本語が挙げられる。また、⑤ストレスアクセントの例としては英語がよく知られている。④と⑤は同じアクセント言語とはいえ、日本語は高低アクセント、英語は強弱アクセントである。つまり、そのアクセントの特徴はある音節の高さ(日本語)や強さ(英語)で際立つことである。



①中国語、タイ語、ベトナム語 ②エウエ語、ハウサ語、ヨルバ語 ③スウェーデン語、ノルウェー語、日本語鹿児島方言 ④日本の多くの方言、朝鮮語の一部分の方言 ⑤英語、ロシア語、ドイツ語、スペイン語

(図 1)アクセントのタイプ<sup>3</sup>

日本語教育の現場において、アクセントの指導は上述した高低アクセントに基づき、「段階観」で教えられている。そこで、「段階観」と「指導法」は切っても切れない関係にあると言えよう。教師はアクセント教育を行う際に、現行のアクセントの指導法はどの段階観に従って行われるかを理解し、その長所と短所を把握することが非常に重要であると思われる。何故なら、指導法は学習者のアクセント学習に関係しているからである。本稿は、以下の三点に絞り考察

<sup>3</sup> (図 1)は斉藤(1998)から引用した (p.109)。

してみたい。(1)日本語のアクセントと中国語の声調の相違を考察する。(2)言語学の観点により、日本語のアクセントの段階観(旧二段観・新二段観・三段観・新三段観)に基づき、アクセント指導の利点と欠点を考える。(3)日本語教育の立場から、従来のアクセントの指導法はどの段階観に当てはまるかを比較し、台湾人学習者に対する日本語アクセント教育に提言をしたい。

## 2. 日中両言語のアクセントの相違

前節で述べたように、斉藤(1998)によると、広義のアクセントの分類では、日本語と中国語はそのアクセントの実現様式は違う。朱(2008)は音声分析を通して、その相違を、「(1)中国語の声調は一つの音節の内部、日本語のアクセントは拍と拍の間に現れる高低変化である。(2)日本語の音域は中国語より狭い。(3)日本語の LH 型アクセント<sup>4</sup>(低高型)は中国語の二声、HL 型アクセント(高低型)は中国語の四声に似ている<sup>5</sup>。また、二拍目は特殊拍と副母音の場合、中国語の一声に近い<sup>6</sup>。(4)日本語のアクセント型は一拍目と二拍目の高さが異なる。例えば、「LH 型」、「HL 型」などがあると指摘している(p.121-123,要約と翻訳は筆者)。」。そのうち、(1)は上述したアクセントと声調の実現様式の相違に関わり、(3)は対照言語学の立場から、アクセントと声調の異同を比較している。両者とも如何にアクセント指導に活かすかに関わるため、とりわけ注目すべきである。

以下、アクセントの実現様式の相違について、(図 2)と(図 3)により説明したい。(図 2)は「五度制標調」に基づき、中国語の声調を描いたものである(林他 2011)。また、(図 3)は川上(1995)の説に従い、

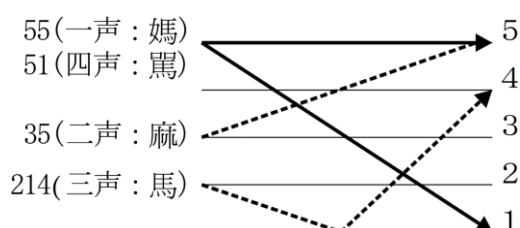
---

<sup>4</sup> 「L(low)」は低、「H(high)」は高を表す。また、p.8 に出る「M(middle)」は中である。

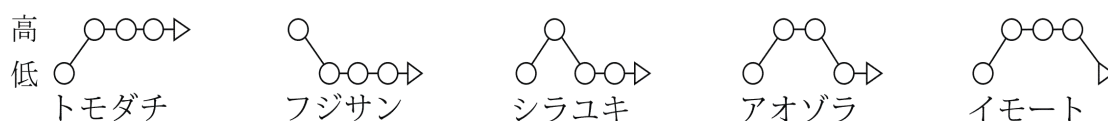
<sup>5</sup> 朱(2008)の主張に対し、王(2000)は短音節の H は中国語の一声、L は半三声に近い。詳しくは p.15 を参照されたい。

<sup>6</sup> つまり、長音節の場合、アクセントの核があるならば(HL 型アクセント)、「一声」ではなく、寧ろ「四声」に近いと言えよう。例えば、「じど'うしゃ(自動車)」がある。一方、アクセントの核を持たない場合(LH 型アクセント)、中国語の一声ではなく、二声に当たる。例えば、「かんじ(漢字)」が挙げられる。

日本語のアクセントを高低二段(すなわち、二段観の「上下」に当たる)で表現するものである。なお、上述した朱(2008)は「拍」と「音節」を同様に扱っているほか、川上(1995)の例は全て整然とした4拍語であるが、「拍」は持続時間により意味に関係し、「音節」はアクセントの核の位置に関わるため、違った役目を果たしている。よって、本稿では「音節」を採用し、以下「音節」と呼ぶ。



(図 2)中国語の声調<sup>7</sup>



注：丸は拍、三角は助詞である。

(図 3)日本語のアクセント

中国語の声調について、斉藤(1998)は一声を「高」、二声を「上がり」、三声を「低」、四声を「下がり」と定めた。すなわち、「高音調」、「上昇調」、「低音調」、「下降調」のことである(p.107)。また、(図 2)のように、一音節[ma]はトーンの調値により、[ma1](媽)、[ma2](麻)、[ma3](馬)、[ma4](罵)の異義語となる。それに対し、日本語のアクセントはそうではなく、「フ'ジサン」を除いた各語(トモダチ、シラ'ユキ、アオゾ'ラ、イモート')の一音節目は低く、二音節目から高くし、また「アクセントの核」以降は低くなる<sup>8</sup>。一方、「フ'ジサン」は一音節目に「核」があるため、そこを最も高くし、それ以降は次第に低くなる。このように、日本語のアクセントは音節間の高低差異に

<sup>7</sup> アラビア数字は声調の調値である。「55」は一声、「35」は二声、「214」は三声、「51」は四声を表す。

<sup>8</sup> そのうち、平板型アクセントの「友達」は「アクセント核」を持たない。

よってできており、上述した朱(2008)の(1)と(4)に当たる。また、日本語は、実際に発音してみると、朱(2008)の(2)の指摘したように、アクセントの「低から高へ(上がり)」は声調の「二声」ほど上昇が際立たない上に、「高から低へ(下がり)」は「四声」ほど下降が激しくない。また、「高」は「一声」ほど高くない上に、「低」は「三声」の下がって、また上がった箇所」ほど低くはない。台湾人学習者はその差異を知覚していなければ、日本語の高低アクセントを身につけにくい。そのため、教師の説明と指導法は大変重要になってくる。

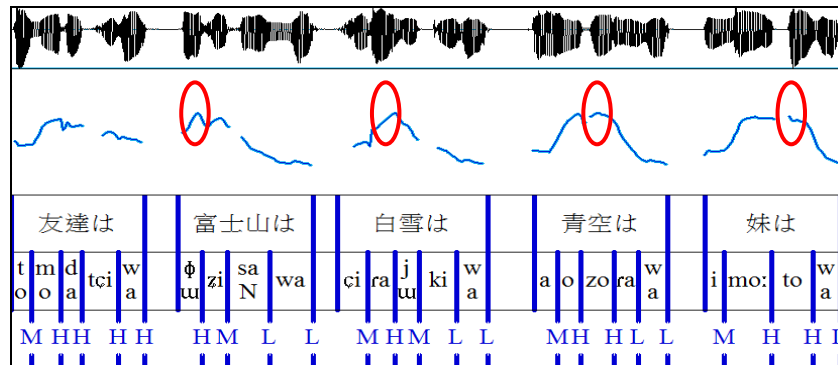
### 3. 日本語のアクセントの段階観について

日本語のアクセントを指導する際に、「二段観」と「三段観」を用いて説明することができる。例えば、最初の音節は、(図 3)は(図 4)と比べ、前者は低(L)から高(H)へ、後者は中(M)から高(H)へ出発し、後者は前者よりやや高く聞こえる。これでわかるように、一音節目のアクセントの高さは二通りあるものの、後者のほうが音声実態に近いと言える。段階論の視点から言うと、前者は「二段観(LH)」で、後者は「三段観(LMH)」でアクセントの姿を説明していると言えよう。なお、(図 3)は図式化したものであり、(図 4)は音声分析ソフトを通じて、語彙のアクセントの音調曲線を示すものである。丸にマークされた箇所は、アクセントの核を表示する音節である。起伏式アクセントである「フ'ジサン」の「フ」、「シラ'ユキ」の「ラ」、「アオゾ'ラ」の「ゾ」、「イモート'(は)<sup>9</sup>」の「ト」は高さが見られる。一方、平板式アクセントの「トモダチ」はアクセントの核を持たないものの、呼気流の減少につれ、「へ字型」の音調曲線が現れ、起伏式のほど下降が激しくない。

---

<sup>9</sup> 本稿は「平板型アクセント」と「尾高型アクセント」を区別するため、以下の各図は助詞をつけて示す。原則的には「文節レベルの単位」ではなく、「語レベルの単位」を扱う。





(図 4)アクセントの相違による語彙の音調曲線<sup>10</sup>

従って、各語の音節を測ってみると、「トモダチ」は「[to]:230Hz/[mo]:290Hz/[da]:297Hz/[tei]:269Hz」、「フ'ジサン」は「[φu]:313Hz/[zi]:310Hz/[saN]:213Hz」、「シ'ラ'ユキ」は「[ei]:232Hz/[ra]:305Hz/[ju]:279Hz/[ki]:203Hz」、「アオゾ'ラ」は「[a]:212Hz/[o]:308Hz/[zo]:329Hz/[ra]:241Hz」、「イモート'(は)」は「[i]:205Hz/[mo:]:298Hz/[to]:308Hz/[wa]:195Hz」である。そのうち、平板型の例を除き、ほかの例はアクセントの核を持つ音節が最も高いヘルツを得ている。なお、頭高型の「フ'ジサン」は徐々に下がるのに対し、ほかの語彙は「第一音節」と「アクセントの核以降の音節」のヘルツは数値の差が大きく見られる。例えば、「シ'ラ'ユキ」の場合、第一音節である「シ(232Hz)」は、アクセントの核の次の音節である「ユ(279Hz)」と比べ 47 ヘルツの差がある。つまり、「シ」が中から始まり、「ラ」が最も高いアクセントの核を持つ音節で、「ユ」が次第に低下し、また「キ」が最も低くなっている。このように、アクセントの実態は(図 4)の三段観で成立される。

ところで、川上(1995)によると、アクセントの段階観は「静的音調観(旧二段観、三段観)」と「動的音調観(新二段観)」に分けられる。一つの文節は前部要素(先行語彙)と後部要素(助詞)を持っている。川上(1995)は前部要素である先行語彙のアクセントに関係なく、後部

<sup>10</sup> (図 4)は新三段観(筆者による三段観)に基づいたものである。三段観(川上 1995)との相違については該当の説明を参照されたい(p.13)。

要素である助詞の高さが既に決まった旧二段観と三段観を「静的音調観」とし、そうでない新二段観を「動的音調観」と呼んでいる。しかし、筆者の立場は違う。調音音声学の視点からみれば、二段観は「静的音調観」、三段観は「動的音調観」と考える<sup>11</sup>。つまり、「静的音調観」は前部要素の先行語彙のアクセントにも関わらず、後部要素の助詞により、アクセントを上下二段で形式的に定める。その一方、「動的音調観」は後部要素の助詞が前部要素の先行語彙のアクセントの成り行きに従い、上中下三段でアクセントの実態を捉える<sup>12</sup>。なお、(表 1)は川上(1995)と筆者の段階観の相違を表すものである。

(表 1)川上(1995)と筆者の段階観の相違

分類の相違 段階観	川上(1995)	筆者
静的音調観	旧二段観、三段観	旧二段観、新二段観
動的音調観	新二段観	三段観、新三段観

以下、筆者の立場に基づき、静的音調観の「旧二段観・新二段観」と動的音調観の「三段観・新三段観(筆者による説)」の相違について論述し、台湾人学習者に対するアクセント教育の利点と欠点を考えていきたい。なお、(図 5)から(図 7)は川上(1995)の説に従い、描い

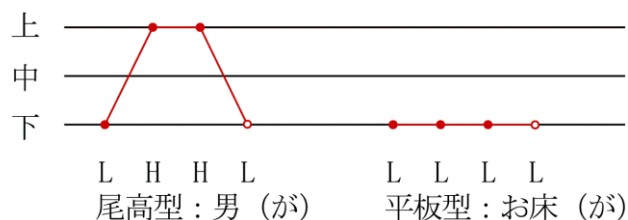
<sup>11</sup>神田(2002)も「三段観」のほうがアクセントの実態に合っていると考えている。とはいえ、神田(2002)は実験音声学ではなく、三段観に基づいた紙面の表記法で語彙のアクセントを説明している。一方、福盛(2010)は三段観を認め、抽象的に体系の分からない段階で音声を記述する際に、ある程度の段階を設けることは無駄ではないと主張している。彼は音声分析を行い、日本人男性と女性の基本周波数の相違を調査した。しかしながら、「二段観」と「三段観」、また「三段観」と「新三段観」の相違に触れていない。なお、(図 4)による実験音声学の視点では、実際の音声は「三段観」に合致していることが示唆される。

<sup>12</sup>「静的音調観」と「動的音調観」の定義については、川上(1995)が「後部要素の助詞」の高さが定められているかどうか注目しているのに対し、筆者は「前部要素の先行語彙」のアクセントの成り行きがどうなっているかに焦点を当てているという違いがある。なお、「助詞」は付属された品詞であるため、文法の面にせよ発音の面にせよ、筆者の「前部要素」に注目した捉え方のほうがより適切であると考えられる。

たものである。

「静的音調観」は（図 5）の旧二段観と（図 6）の新二段観がある。現在、教育現場において、二段観でアクセントを説明することが多い(天沼他 2001)。また、教科書や辞書も同じ上下二段でアクセントを表記する。とはいえ、旧二段観と新二段観は違う。尾高型の「男(が)」は相違がないが、平板型の「お床(が)」は異なる。つまり、旧二段観では、平板型の「お床(が)」と尾高型の「男(が)」は一音節目が共に低いが、その後の高さは違う。尾高型は「こ」と助詞「が」は高低差を作るため、真ん中の「と」がより高くなっている。それと区別するため、平板型は真ん中の「と」を低くし、結局、語彙全体のアクセントは「L」となっている。更に、旧二段観に従って発音してみれば、口の開きは尾高型より平板型のほうが狭い点が新二段観と相違している。なお、便宜上、旧二段観の助詞「が」は先行語彙のアクセントを問わず、「L」に定める。

(1) 旧二段観

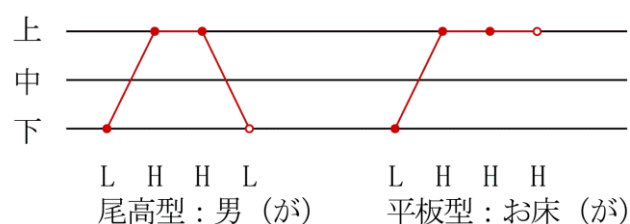


(図 5)旧二段観

一方、新二段観は助詞「が」の高さを定めず、平板型の場合、助詞「が」は先行した「お床」の影響を受け、「H」で続く。尾高型の場合、助詞「が」はその前の「男」に従い、「L」で終わる。一見、新二段観は動的音調観のように見えるが、前部要素のアクセントにも関わらず、後部要素のみに注目する場合、平板型が「H」、尾高型が「L」と既に決まっているため、新二段観も静的音調観であると思われる。ただし、助詞の高さは最初から決まっているわけではないという川上(1995)の説からみれば、新二段観は旧二段観ほど静的な性格が顕著ではないと言える。また、新二段観は助詞の高さによ

り、先行語彙のアクセントは平板型か尾高型かが推測できるため、学習者にとって旧二段観より理解しやすい。更に、表記としては新二段観は後部要素の高さのみ相違が出るため、旧二段観より経済的である。なお、教育現場においてよく使われるのは「旧二段観」ではなく、「新二段観」である。

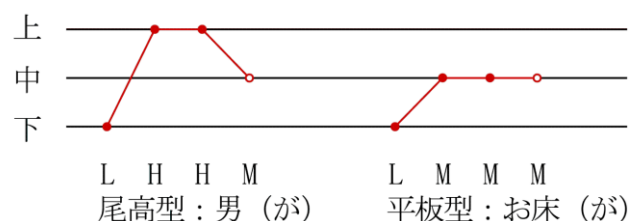
### (2) 新二段観



(図 6)新二段観

上述した「静的音調観」の旧二段観と新二段観に対し、「動的音調観」の三段観がある(図 7 参照)。三段観は、旧二段観と新二段観と比べると、動的な性格が強く見られる。何故なら、調音する際に、呼気の減少につれ、「自然下降」の現象が感じられるからである<sup>13</sup>。それに応じるため、三段観はアクセントを「上 (H)」、「中 (M)」、「下 (L)」に分け、その実態をより確実に記述している。しかし、実際の音声に近づいたものの、三段観の説明は細かいため、学習者は気づきにくいかもしれない。その上、表記方式は新二段観より複雑である。

### (3) 三段観

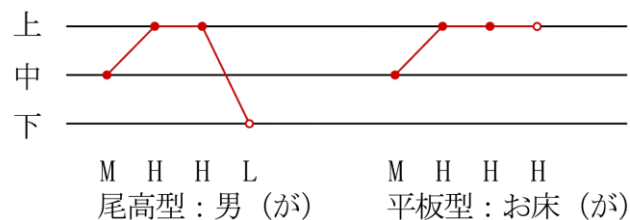


(図 7)三段観

<sup>13</sup> そのほか、音声分析ソフトを通して、「へ字型の自然下降」の現象も観察できる。例えば、(図 4)に挙げられた「友達」がある。

この三段観の定義についての筆者と川上(1995)の主張にはズレがある。(図 8)新三段観<sup>14</sup>と(図 7)三段観の差異は、最初の音節と助詞の高さに見られる。要するに、(図 8)の場合、一音節目の生起が中から高へ昇り、また、アクセント(平板型か尾高型か)によって助詞が「L」か「H」に決まる。更に、尾高型の場合、助詞「が」の高さは一音節目「お」の高さより一段低く、上中下といった三段階のアクセントが実現される。調音音声学の視点からみれば、(図 8)は(図 9)の「へ字型の自然下降」と同じである。また、(図 9)では、アクセントを問わず、共に自然下降の音響現象を呈しているが、尾高型の「が」は平板型の「が」より低いのを観察することができる。そのため、(図 8)は(図 7)より音声実態に合った動的音調観と言える。現在、教育現場でよく使われる三段観の説明は「三段観」ではなく、「新三段観」である<sup>15</sup>。

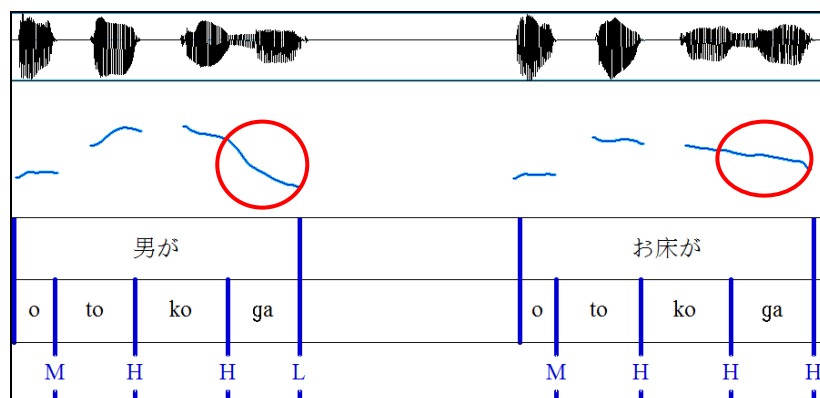
(4) 新三段観



(図 8)新三段観

<sup>14</sup> 筆者は(図 8)を「新三段観」と呼ぶ。それに対し、「三段観」は川上(1995)の説であるため、「旧三段観」と呼ばない。

<sup>15</sup> 例えば、楊(1998)の楽譜式表記法、神田(2002)の三線式表記法が挙げられる。これらは本稿の立場と同じ、「新三段観」を採用している。



(図 9)「男(が)」と「お床(が)」によるへ字型の自然下降<sup>16</sup>

以上から、アクセントの段階観について、以下のような結論を出すことができる。(1)日本語の高低アクセントは、筆者の説に基づき、「静的音調観」の旧二段観、新二段観と「動的音調観」の三段観、新三段観で説明できる。(2)表記の面では、三段観より二段観のほうが学習者にとって受け入れやすく、表記方式は経済的である。とりわけ、新二段観の説明を用いたら、助詞から先行語彙は平板型か尾高型が判断できる。(3)調音の面では、三段観は実際の調音運動を観察し工夫した動的音調観である。また、三段観とはいえ、新三段観は三段観より音声実態に合っている。音声教育の場合、三段観で説明を行ったほうが二段観のより妥当であり、理想的だと思われる。

#### 4. 日本語のアクセントの指導法とその段階観

日本語のアクセント指導と言えば、普通、学習者の「台湾式アクセント<sup>17</sup>」を正すほか、単純語や複合語や活用変化のアクセント規則を学ばせることなどが思い浮かぶ。要するに、学習者のアクセントを正しい共通語アクセントに正すことが指導のポイントとなる。しかし、一方的にアクセントを正すことや規則をひたすら覚えさせ

<sup>16</sup> マークされた箇所は自然下降における助詞「が」の成り行きである。右の平板型「お床(が)」の自然下降は、左の尾高型「男(が)」より高く見える。また、(図 9) の平板型「お床(が)」は実際産出された音声であるため、やや傾きが見られ、(図 8)の図式化したものと比べると、多少相違が出る。

<sup>17</sup> 「台湾式アクセント」とは、アクセントの核は語尾から二番目の音節に来ることを指す(蔡 1977)。

ることで、果たして学習者にアクセントに対する高低感覚がどれだけ定着させられるかは、疑問である。アクセントを正す前に、まずその高低感覚を身につけさせるのが重要である。以上、日中両言語のアクセントの相違を比較し、それに応じて、アクセントの段階観による指導の良し悪しを述べてきた。本節では、学習者にアクセントを提示する際に、その指導法は段階観を用いるかどうか、もし取り入れるなら、段階観を如何に活かすかについて考察してみたい。

王(2000)と黄(2003)は対照言語学の立場から、学習者の母語である中国語の声調を使用し、日本語の高低アクセントを説明している。王(2000)は日本語の音節を「短音節」と「長音節(長音と撥音を持つ音節)」に分け、またそれらをアクセントの「上(高音)」と「下(低音)」の二段に対応し、四つの組み合わせがあるとしている。つまり、短音節の高は一声、短音節の低は半三声<sup>18</sup>、長音節の高(跨拍上昇音)は二声、長音節の低(跨拍下降音)は四声に近い。また、促音は一拍を休む休止符と同じように扱われるということである<sup>19</sup>。例えば、「[a1o3<sup>20</sup>]あお(青)」、「[ki3 休 tei1<sup>21</sup>]きって(切手)」、「[qi-4zi3]チーズ(cheese)」などが挙げられる。更に、音声分析を行った結果、短音節の場合、中国語の一声と半三声は日本語の高音と低音より音域が広い。長音節の場合、二声は高音より上昇が高く、四声は低音より急激に下がると指摘している。これが前述した朱(2008)の分析結果(2)に一致している。指導する際に、学習者にこれらを説明する必要がある。しかし、「音域の相違」でアクセントと声調の異なったところを説明するのは、抽象的であるため、音声分析ソフトを使用して説明しないと、理解しにくいであろう。それより、聴覚音声学及び調

---

<sup>18</sup> 「半三声」とは、全三声の前半に見られる、やや下降する部分の音である(王2000)。また、(図2)の調値の21に当たる。




<sup>19</sup> この指導法は促音を含む長音節を「短音節+休止(促音)」と見なす。

<sup>20</sup> [ ]内のローマ字は中国語の発音であり、数字は声調である。

<sup>21</sup> 王(2000)はローマ字で「切手」を「ki3tei1」に表記した。しかし、日本語には「ei」の発音、中国語には「tei」の音節の組み合わせがないため、これらは誤った綴りである。

音声学の方法を用いて、学習者に「へ字型の自然下降」の現象に気づかせ、また、如何にそれを産出するか指導することが肝心であると思われる。

一方、黄(2003)の主張は王(2000)とほぼ同じである。ただし、促音は高低を持ち得ないため、そのアクセントを「ゼロ」に定めている。また、「い」の前に意味の切れ目がある場合、そのアクセントが「高」の場合、「一声」に当たる。例えば、「(311<sup>22</sup>)ていれ(手入れ)」、「(311)けいと(毛糸)」が挙げられる。一方、そのアクセントは「低」の場合、「三声」に当たる。例えば、「(13-)しゃいん(社員)」がある。いずれにせよ、王(2000)と黄(2003)で取り上げられた対照法は中国語の声調を日本語のアクセントに当てはめ、アクセントを二段観で指導する方法だと言える。しかも、二段観といっても、「新二段観」の立場に近いことが明らかである(図 6 参照)。なお、対照法で指導する場合、学習者の母語の特徴を活かすため、より親しみのある方法であるが、尾高型の「男(が)」の場合、一音節目と助詞を同じ「L(半三声)」に規定すると、「静的音調観」になる(図 6 参照)。こうして、学習者が発話する際に、文節と文節のアクセントは互いに融合せず、上がり下がりが顕著であるため、複合語節やイントネーションの習得にまで影響を及ぼすことが考えられる。例えば、複合語節「男が

いる」の場合、学習者は「 おどこが いる」ではなく、「 おどこが  いる」と発音してしまう例がしばしば見られる。これについての指導は、後述するように考え直す必要がある(図 11 参照)。

ところで、台湾人学習者のアクセント習得の問題点について、楊(1998)は先行研究の成果をまとめ、「(1)平板型が難しい。(2)尾高型が難しい。(3)拍数が多くなるにつれ、頭高型も難しくなる。(4)語の終わりから二拍目にアクセント核が置かれる「-2 型」になるケースが最も多い。(5)特殊拍などがあると、その一つ前の音節にアクセン

<sup>22</sup> ( )内の数字はアクセントを声調で表す意味である。



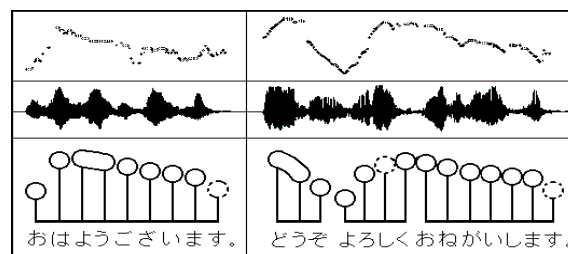
ト核を置く傾向が多い。(6)助詞が付いたり、複合語になったりしても元の型にして分解する傾向がある。」という結論を得ている。そのうち、(4)と(5)は台湾式アクセントの誤りを指す(蔡 1977)。(1)と(2)は後部要素の助詞のアクセントを見逃した故、「旧二段観」と「三段観」による指導は不十分であることが裏付けられる(図 5 と図 7 参照)。(3)と(6)の場合、日本語は拍数が多くなるにつれ、経済的な調音の仕方を用いるため、まとまった意味に従い(アクセントの統語機能)、アクセントは融合する。それに対し、中国語の声調は漢字を音節単位として、一々発音しなければならない、学習者はその影響を受け、産出したアクセントは不安定である<sup>23</sup>。よって、学習者に「へ字型の自然下降」に対する知覚と産出を指導する必要があると思われる。

前述した対照法のほか、楊(1998)はアクセントの指導に、(1)ミニマル・ペア、(2)ロボットの音まね、(3)楽譜式と表記法の方法を実践していることが挙げられている。以下、これらの指導法と段階観の関わり合いを述べたい。(1)「ミニマル・ペア」とは、同音異義語を取り上げ、アクセントの弁別機能で意味の相違を説明する方法である。例えば、「ひ(日)」と「ひ'(火)」、「はし(橋)」と「は'し(箸)」はアクセントが異なっている。この指導法は高音と低音の相違に注目するため、対照法と同じ二段観の立場でアクセントを捉えている。(2)「ロボットの音まね」は平板型アクセントのみの指導に用いる。要するに、学習者にロボットのようなしゃべり方をまねさせ、高音に止め、平坦を保つ練習である。しかし、低音の一音節目の生起は考慮されず、平板型の場合、語彙全体を同じ高さにし、「旧二段観」の観点に近いと言えよう(図 5 参照)。(3)「楽譜式」と「表記法」について、「楽譜式」は三線譜を使用し、アクセントの高低位置を二段か三段で説明する。この方法は段階観に基づいた指導法に当たると言える。しかし、楊(1998)では、指導の初期に難しい「新三段観(動

<sup>23</sup> 一方、母語を台湾語とする学習者の場合も同じである。田中(2011)は、台湾式アクセントの起因は台湾語による干渉だけでなく、ほかの要因で起きた可能性もあると指摘している。

的音調観)」で学習者に高音と低音の相違を提示し、その後に易しい「新二段観(静的音調観)」に戻すという方法を取った理由について、述べられていない。一方、「表記法」は低音を見捨て、棒線で高音のみを表記し、指導時によく使われる方法である。この方法は、(1)と(2)と共に二段観による指導法である。

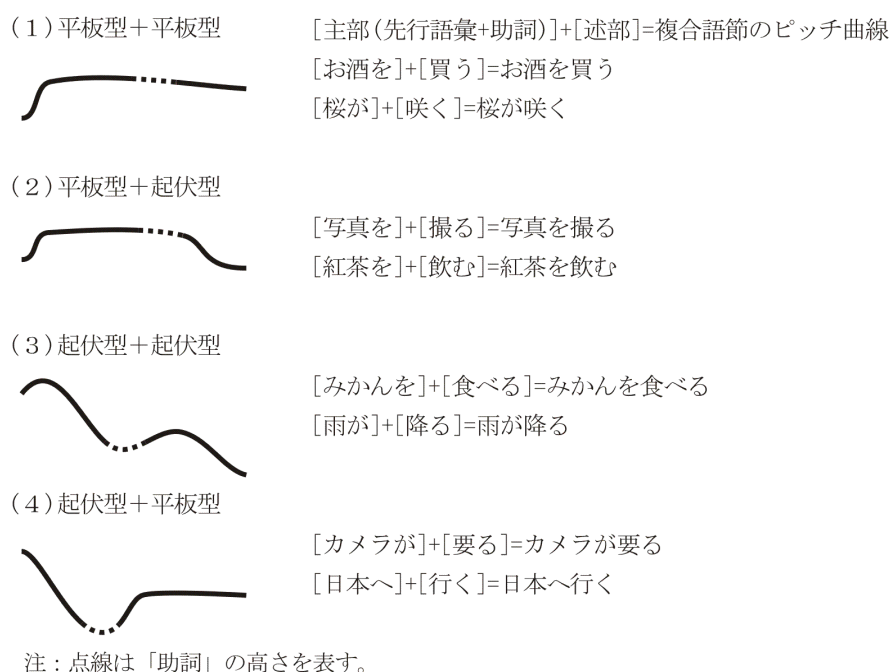
以上のように、指導法のほとんどは二段観に基づいていることがわかる。確かに、二段観のほうが説明しやすく、学習者にとって理解しやすい。しかしながら、三段観は自然な発話に近いことが(図4)と(図9)で確認できた。自然な発話により産出された「へ字型の自然下降」は、アクセントにもイントネーションにも見られる共通した現象である。松崎他(1998)によると、日本語のアクセントとイントネーションは共存関係であるため、イントネーションはアクセントの型を崩さない。逆に言うと、アクセントの習得はイントネーション習得の成否に繋がる。(図10)は発話時のイントネーションを示すものであるが、それにおけるアクセントは(図8)のような図式化したものと多少相違があっても、それに当たる語彙のアクセントとは何も変わらない。また、音声の波形(中段)は音声分析を通して実現したものがピッチ曲線(上段)である。更に、ピッチ曲線に基づき、描かれたものはプロソディーグラフ(下段)である(河野他 2010)。普段、日本語を話す時、話者は特別な感情を込めない、或いは疑問文でない限り、その音声の気流は(図10)のピッチ曲線とプロソディーグラフの成り行きと一致するはずである。



(図10)音声のピッチ曲線・波形・プロソディーグラフ<sup>24</sup>

<sup>24</sup> (図10)は河野他(2010)から引用し、それぞれ上からは音声のピッチ曲線、波形、

なお、文節のみならず、それより大きい発話単位である文に対し、それらの「へ字型の自然下降」を指導する際に、最も理想的なやり方は音声分析ソフト<sup>25</sup>を使って説明を行う方法である。しかし、(図 11)のようにプロソディーグラフを簡略化した曲線で提示する方法もある(田中他 1999、郭 2010)。つまり、発話しながら、呼気の減少につれ、述部(「買う」、「咲く」など)は主部(「お酒を」、「桜が」など)より下がること(へ字型の自然下降)を教える方法である。



(図 11)複合語節のピッチ曲線

## 5. おわりに

本稿は、日中両言語のアクセントの相違を考察し、段階観による日本語のアクセント指導の利点と欠点を考えた。また、従来の指導法は段階観を用いているかどうかを検討し比較した上、以下のような結論が得られた。これらの結論に基づき、台湾人学習者に対する

プロソディーグラフである。

<sup>25</sup> 無料音声分析ソフトはネットでダウンロードできる。例えば、「Praat」や「Wavesufer」がある。

日本語アクセント教育への提言も共に示す。

(1)筆者の立場によると、アクセントの段階観は「二段観(旧二段観・新二段観)」と「三段観(三段観・新三段観)」に分けられる。前者は「静的音調観」であるのに対し、後者は「動的音調観」である。また、「二段観」は表記も説明も経済的であり、「三段観」のほうが音声実態に近いと言える。学習者により自然なアクセントを身につけさせるため、指導する際に、「二段観」に偏らず、「三段観」を取り入れる必要があると思われる。

(2)三段観について、音声分析を通し、川上(1995)の「三段観」より筆者の「新三段観」のほうが、調音する際の「へ字型の自然下降」に合っていることが実証できた。また、言語学の観点から、新三段観は前部要素の先行語彙の高さを考慮するのみならず、新二段観の利点も取り入れ、後部要素の助詞の高さは平板型を「H」、尾高型を「L」に定めた。そのため、アクセントの段階観のモジュールとして、「新三段観」はほかの段階観より勝っていることが明らかである。

(3)日本語教育の立場では、本稿に取り上げられた対照法、ミニマル・ペア、ロボットの音まね、表記法といった先行研究の指導法は二段観の立場に偏っていることが明らかになった。しかし、発話の実態に合わせ、より自然なアクセントを習得させるため、三段観による指導が大切である。その指導法として、楽譜式による指導だけでなく、プロソデーグラフの使用や音声分析ソフトによるピッチ曲線といった可視化の方法も考えられる。

付記 1:本稿は、2012 年 4 月に東呉大学日本語学科で行われた「日語教學國際會議」で発表した内容に加筆・修正を行ったものである。

付記 2:査読の際には匿名の先生方により大変有益なコメントをいただきました。ここにお礼を申し上げます。

## 参考文献

### 中国語

郭獻尹「關於台灣日語專攻學習者之發音課程設計及教學方法」『2010年東吳大學外國語文學院校際學術研討會』、台北：東吳大學外國語文學院、2010、57-81 頁。

朱春躍『語音詳解』、北京:外語教學與研究出版社、2008。

林燾、王理嘉『語音學教程』、台北:五南圖書出版社股份有限公司、2011。

### 日本語

天沼寧、大坪一夫、水谷修『日本語音声学』、東京:くろしお出版、2001。

上野和昭「日本語アクセント史研究とアクセント観」『音声研究』第7巻1号、東京：日本音声学、2003、47-57 頁。

王曉青「中国語の四声と日本語の東京アクセントの対照研究－日本語のアクセントの高低感覚に関する指導のために－」『台湾日本語文学報』第15期、2000、11-34 頁。

川上葵『日本語アクセント論集』、東京:汲古書院、1995。

河野俊之、串田真知子、築地伸美、松崎寛『1日10分発音練習』、東京:くろしお出版、2004。

神田卓朗「日本語アクセントの表記に関する考察－三線式表記法－」『岐阜女子大学紀要』第32号、2002、51-58 頁。

黄招憲「日本語アクセントと中国語声調の対照教授法について」『台湾応用日語研究』第1期、2003、86-102 頁。

蔡茂豊「中国人の日本語教育における理論と実践の研究」『東吳大学東方語文学系学報』第2期、1977、1-127 頁。

斉藤純男『日本語音声学入門』、東京:株式会社三省堂、1998。

田中研也「学習者の日本語アクセントにおける台湾語からの転移について」『景文科技大学応用日語研討会』、台北：景文科技大学応用日語系、2011、26-37 頁。

田中真一、窪蘭晴夫『日本語の発音教室－理論と練習－』、東京:く

ろしお出版、1999。

福盛貴弘『基礎からの日本語音声学』、東京:東京堂出版、2010。

松崎寛、河野俊之『よくわかる音声』、東京:アルク、1998。

松森晶子、新田哲夫、木部暢子、中井幸比古『日本語アクセント入門』、東京:三省堂、2012。

楊煜雯「台湾人学習者の日本語における高低感覚についての考察」  
『銘傳日本語教育』第1期、1998、35-78頁。